

# 体当たりの追究から生まれる探究的・協同的な学び

## —「総合的な学習の時間」創設以前における小5社会「酪農にかける片岡さん」の実践分析を通して—

荻野 嘉美

(愛知教育大学大学院 教育学研究科)

Inquisitive & Cooperative Learning created from Investigation of "TAIATARI".

Yoshimi OGINO

(Graduate Student, Aichi University of Education)

### I 問題の所在と問題意識

1998年の学習指導要領改訂で「総合的な学習の時間」が創設されて以来、様々な実践が現場の教師と子どもにより創造され展開されてきた。

2008年の学習指導要領改訂では、「総合的な学習の時間」の教育課程上の位置づけが明確にされた。総合的な学習の時間の目標、各学校において定める目標及び内容、指導計画(全体計画と年間指導計画及び単元計画)、評価、学習指導、推進するための体制づくりなどを示した「解説書」も作成された。

総合的な学習の時間のあり方は、様々な面で整えられてきており、教育現場においても定着してきている。こうした状況の中、総合的学習の特質である「探究的・協同的な学び」としての実践の創造と展開が教育現場に求められている。

しかし、果たして総合的な学習の時間の現状は、子ども自らが問いをもち、子どもと教師が地域の具体的事実に「体当たりの追究」をし、共に学びを深め成長していく場になっているだろうかという問いが生まれてくる。

こうした問題意識から、総合的学習の実践を、子ども自らが探究的・協同的に学び、深化・拡充していくための視点を明らかにしたいと考えた。

筆者は、1976年に新任教師として赴任して以来、豊富小学校(13年)、額田中学校(5年)、宮崎小学校(2年)、大雨河小学校(8年)、千万町小学校(6年)、そして校長として形埜小学校(4年)と額田地域<sup>2</sup>(愛知県額田郡額田町。2006年1月1日からは合併により岡崎市)の学校に継続して勤務してきた。愛知県三河山間部に位置する額田地域の学校には、地域

に根ざし、子ども主体の授業実践を展開してきた教育の伝統がある。

本稿では、小5社会「酪農にかける片岡さん」(社会科を軸にした総合的・合科的追究)を分析の対象とする。筆者の38年間にわたる教師生活における自らの授業実践史における青年教師の時代(教師生活7年目)における実践である、

本実践は、1982年度に実施されている。「総合的な学習の時間」創設以前の社会科を軸とした総合的・合科的学習としての実践である。したがって、教育課程上も「総合的な学習の時間」が位置付いていない時期のものである。

田村学(2014)は、『『総合的な学習の時間』創設以前において、その萌芽となる教育実践が各地でじっくりと積み重ねられていた<sup>3</sup>』と述べている。本実践は、こうした一連の実践に連なるものである。

本実践の追究は、社会科の地域の酪農家見学から始まった。地域の酪農家と出会い、ふれ合い、思いを深くしていく中で、関連的・総合的に追究が広がっていった。そこには、体当たりの追究を通して探究的・協同的な学びの様相を呈している子どもの姿が見られる。また、地域にある具体的事物(もの・こと・ひと)と地域生活者としての「地域の先生」とのふれ合いを通じて、子どもの成長する姿に呼応し自らを育てていく教師自身の成長の姿が見られる。

1980年代に、愛知県額田地域の小学校で営まれた子どもと教師の体当たりの社会科を軸とした総合的・合科的追究による実践を分析・考察することにより、現代の総合的学習につながる教訓(視点)を導き出したいというのが、本論文の問題意識である。

## II 「総合的な学習の時間」創設以前の社会科実践に見る総合的学習への萌芽

### 1 豊富小学校の「自主学習への過程」の教育

筆者が新任教員として最初に赴任した豊富小学校は、重松鷹泰をメイン講師として、「自主学習への過程」をテーマに、毎年自主的な研究発表会を開催していた。

『板書する子どもたち』（重松鷹泰指導・豊富小学校著、明治図書、1974）に象徴されるように、子どもの追究の可能性を信頼し、地域教材や自主教材を発掘して授業として取り組み、子どもが主人公となる体当たりの授業実践を展開していた。詳細な授業の逐語記録を作成し、子どもの追究という授業の事実をもとに研修を重ねていた。

次の詩は、そうした豊富小学校の「自主学習への過程」という教育実践の理念を象徴する詩「学習は子どものもの」である。

詩「学習は子どものもの」 (前半略)

学習は 子どものもの  
彼たちの 力を信じて 思い切ってまかせよう  
彼女らは 苦しい学習を 助け合い がんばり抜き  
「新しいものを 生み出したよろこび」をそこに味わう  
ひとりひとりを 伸ばす指導  
教師 それは かげで強く動いている<sup>4</sup>

#### (1) 重松鷹泰の授業観

重松は、授業分析の成果として、「自分の心に感銘を与えたよい授業の三つの特質」として、次の三つの要件を提案している。

① 教師の予想を超えるような発言や意見が表れるということである。（教師の予想を超える子どもの発言）それは教師の予定をくるわすのであるが、学級の成員の目を開き、追究の意欲を高める「本音」ともいうべき意見である。こういう本音が表れてくるということは、授業の中での追究が子どもたち自身のものであり、また真剣なものである証拠なのである。

② 子どもたちの助け合いが適切であり緊密であるということである。（子どもたちの緊密な助け合い）子どもたち全員が助け合い、補い合いながら真実を探っていく勢いが強いということ。

③ 授業中のある瞬間や授業の終了した瞬間に、何かしみじみとした感懐が子どもにも授業者にも、そして見ている人たちにもわき上がってくるということ（しみじみとした感懐と魂のふれあい）

子どもと子ども、子どもと教師、さらには子どもと教材との間に、人間的な接触、魂のふれあいといったものがある。<sup>5</sup>

（番号、下線は筆者が加筆）

こうした重松のよい授業の三つの特質の指摘に学びながら、授業実践での子どもの追究を省察してみたい。

#### (2) 体当たりの追究

当時の豊富小学校の共同研究者であった清水毅四郎は、『個性的追究を支える授業』（1989）において、「個性的追究」について次のように述べている。

クイズの解答の場合にみるような、記号や言葉を頭の中で、あれこれ解釈(解決)していくことというよりも、学習者が積極的に体（目・手・足）を使って、つまり、見学・調査・計測・文章(絵画)表現などを通して、体当たりで学習対象や課題の意味や構造連関を追い求め求めていく、そのような精神機能を表現し、強調したいために、あえて思考ではなくて追究という語を使いたいのである。<sup>6</sup>

（番号、下線は筆者が加筆）

筆者が本稿で述べている「体当たりの追究」は、重松の授業論と共に、清水のこの「個性的追究」論に影響を受けている。

筆者は、「体当たりの追究とは、単に頭の中での知識の操作にとどまらず、子ども自らが五官を総動員して体全体を働かせて対象に深く関わり、自分の問いを追いかけてねばり強く考え続けていくこと」と定義している。

#### (3) 教師の自己形成過程

教師の自己形成過程とは、教師としての教育的力量の向上と共に人間的な成長の過程をも含みこんだものととらえている。学習(社会科)を子どもと共により深くより体験的に展開しようと構想する中で、社会科実践が自ずと関連的・総合的な追究の様相を見せてきた。そこに働いた教師の創意工夫と構想力・実践力の意味を考察していきたい。

本稿では、「担任としての授業づくり・学級づくり」に無我夢中で取り組んでいた教師生活7年目の授業実践を軸に取り上げる。「教師としての基盤形成期」とも言うべきこの時期において、社会科学習としての子どもの学びと成長に呼応して、どのように教師自身の自己形成がなされていったのかについても関連づけて考察したい。

## 2 豊富小5年社会科単元「酪農にかける片岡さん」の誕生と子どもの体当たり追究

「酪農にかける片岡さん」の授業実践は、5年生の社会科「日本の農業」について、豊富地域で農業を営む典型的な農家の現実と生き方を追究することを通して、日本の農業の現実と抱える問題点にも迫ろうとした実践である。

### (1) 単元構想(学習指導計画)の柔軟な修正・拡充

本単元の追究の全体構想(学習指導計画)は次ページの図1の通りである。この構想は、子どもの追究の進展につれて、何度も修正し、書き直され加筆されていってでき上がってきたものである。単元構想(学習指導計画)は、固定された動かせないものではなく、むしろ教師の教材研究の深化と子どもの追究の様相によって修正し、拡充されるものという考えが豊富小の教育実践の基本にあったのである。

当初は、日本の農業を子どもがとらえていくために、次のⅠ、Ⅱのような単元全体の構想(学習指導計画)を立てて授業を展開していった。

「Ⅰ 1日の献立と農業とのかかわり」として、「人間の生活における食事と農業とのかかわり」を切り口に、地域の農業の特徴を端的に表す具体的事例として豊富の稲作農家を取り上げていった。

「Ⅱ 稲作農家(広人君の家の農業)」として、食料生産の根幹をなしている稲作について、地域の人々の生産を高める苦労や工夫、農業経営の実態と問題点を気付かせたいと考えた。稲作のために、ため池から水を引く苦労、農機具の移り変わり、働き人の苦労、減反の問題点について考え合っていた。

田植え前の農家の見学と聞き取り調査なども交え、子どもは熱心に追究していったが、どうしても「農業にかけるという熱い思い」「農業の未来へ希望をつなぐ」という点で、教師としては、追究に物足りなさを感じていたのである。

そんな中で、稲作との複合経営で肉牛の飼育していることが話題になっていった。そして教師の教材発掘の過程で浮かび上がってきたのが、豊富の地に根ざした酪農の専業農家である片岡牧場とその家族の人々の存在である。そこで、「Ⅲ 豊富の畜産(酪農にかける片岡さん)」という小単元が新たに生まれていったのである。

### (2) 教師自身が地域に出かけ、ほれ込む教材の発掘

教師自身も、地域に、片岡牧場という酪農家があることは知ってはいたが、外から牛舎を概観する程度の認識でしかなかった。

「私の家の近くの片岡牧場も牛を飼っているよ。糞掃除と乳しぼりをやらせてもらったよ。」という子どもの声に惹かれるように、下見に出かけた。

教師がまずは片岡牧場に足を運び、片岡牧場の牛舎に入れてもらい、親牛を目の当たりにし、現場のにおいと空気を感じていった。糞尿の掃除やえさやり、乳しぼりなど牛の世話をする片岡家の人々に共感を深めていった。見学しながら、酪農について浮かび上がってきた疑問や感想を片岡さんにつけていった。会話したり、時には、教師自身が、糞尿の掃除やえさやり、乳しぼりなどの体験もさせてもらったりしながら、片岡牧場への思いが深くなっていったのである。

片岡牧場を学級の子どものにも出合わせ、追究の対象としていきたいという思いが、教師自身の中にわき起こってきたのである。教師自身がほれ込むような教材の発掘は、子どもの追究に拍車をかける不可欠の要素である。

### (3) 子どもの体当たりの追究

社会科の追究として、子どもは酪農家の仕事の見学や聞き取りなどの調査活動、えさやり、糞掃除、乳しぼり等の体験活動をし、絵を描き、「考えノート」に感じ考えたことを書く表現活動などを展開していった。親子2代にわたる酪農家経営、飼い始めた頃の親牛が死ぬという事態を乗り越えて受け継がれてきたこと、家族での労働、小さい子どもが一人前に働いていること、乳しぼり、牛の出産という感動的な場面との出会い。このような体当たりの追究の中で、子どもは牛に親しみ、酪農にかける片岡さんへの共感を深めていった。

(3)学習指導計画「豊富の農業」—酪農にかける片岡さん—総16時間(豊富の農業 総36時間) (教師の構え)

I 1日の献立と農業とのかかわり ③時間

- ・毎日食べているものは農家の人が作り出したものがほとんどだ。(広人ら)

人間の食生活における農業の重要な意味を、身近な1日の食事をもとにとらえさせたい。

II 稲作農家(洋人君の家の農業) ⑭時間

- ・土地と水—ため池・用水・ポンプ小屋(徹也ら)
- ・働く人の苦勞(潤子、雪恵ら)
- ・農機具のうつりかわり(博之、真ら)
- ・複合経営(肉牛の世話)(佳織、路代ら)
- ・米作りの今と昔(幹広ら)
- ・減反(大介、岩次郎ら)

洋人の家の農業を例として食糧生産の根幹をなしている稲作について、地域の人々の生活を高める苦勞や工夫、農業経営の実態と問題点に気づかせたい。

III 豊富の畜産(酪農にかける片岡さん) ⑯時間

青山忠良さんの家の見学・作文 ①時間

《牛をかう人の苦勞や工夫のしどころを見つけよう!》

片岡牧場の見学・作文 ③時間

気に入ったところの発表とひとり調べをして自分の追究問題をもつ③時間

子牛の誕生(VTR)・詩を書く(国語)

牛にたくす願いを歌う(音楽)

子どもの追究意欲を高めるために、国語や社会でも、関連、発展させて、総合的な単元展開をはかりたい。

《酪農経営の歩み》

2 牛小屋のつくり ①時間

- ・牛小屋に片岡さんが牛をかってきた歴史がある(岩次郎)
- ・牛小屋が3つと牧場が2つある、だんだんふやしてきた(明雄)

3 片岡牧場の歩み ③時間

牛をかい始めたきっかけ

- ・「豊富の酪農」といわれるほど、酪農がさかんで豊富だけで50軒ぐらいの家がかった。

牛の死をのりこえて酪農を続けてきた 本時10/16時

- ・牛が続けて3頭死んだ時、くやしくて「今度こそ死なせないぞ。」と思った(真)
- ・山あいの地で現金(お金)をもうけるために牛をかい、こつこつとふやし続けてきた。

片岡さんの2人の息子さんが後をついだ

- ・お父さんたちの苦勞を見て後をつごうとした。

片岡さんが2代にわたり乳牛をかい、酪農を営み経営を拡大してきた事実から、片岡さんの酪農にかける強い願いに目を向けてほしい。

4 病気をふせぐ ①時間

- ・乳房炎になると乳をしぼれない
- ・お産のあと病気にかかりやすい(佳織ら)
- ・片岡さんは、えさの食べ具合で牛の調子がわかる(宮子)

病気をふせぐ牛の世話のあり方、気をつけていること、獣医さんの存在の意味にも目を向けてほしい。

酪農にかける片岡さんの思いや願い

家族みんなで支えあっていい乳をたくさん牛が病気になるないように

《現在の酪農経営の努力》

1 施設・設備(生産用具の工夫) ①時間

- ・大きな2台の扇風機(すずしくする工夫)(真木子ら)
- ・大きな手動の戸、ミルクカー、ミルククーラー
- ・地下式の尿タンク
- ・工夫がいっぱいある(康治、高二ら)

牛にとってもすみやすく、働く人にとっても働きやすい施設や設備の工夫に気づかせたい。

5 牛の世話・働く人・家族労働 ①時間

- ・乳しぼりやえさやり、ふんそうじを真剣な目でやっている(潤子)
- ・朝ごはんが10時で昼ごはんが2時で、晚ごはんが10時だ(宗博ら)
- ・年中無休だけで家族で協力している(好子)

働く人の真剣な目や1日の仕事の中身に目を向けると共に、家族の共同労働によって経営を成り立たせていることに気づかせたい。

6 機械代・えさ代(酪農経営) ①時間

- ・機械代だけでも多くのお金がいるし、他にも牛舎や土地のお金がかかっている(有貴)
- ・外国から飼料をかっていて、えさ代だけでも年1200万円もかかる(広人ら)
- ・酪農をやめていく農家もある(明雄)

外国から輸入している飼料代の値上がり、乳価のすえおきで、えさ代=乳価というような収支の状況など、酪農のかかえる問題点にも目を向けていかせたい。

7 乳の生産調整 ①時間

- ・米の減反と同じように乳の生産調整がある
- ・乳質検査に不合格で、せっかくしぼったミルククーラー一杯分(750kg)の乳を山にすてなければならないなんてくやしい(大介)

農産物の輸入自由化の働きなどもからめ、せっかく苦勞してしぼった乳を安くされたり、捨てたりしなければならない農家の人の悩みや怒りにも目を向けていきたい。

山あいの豊富の地に根をはり、親子2代にわたって酪農を営む片岡さんの生き様、酪農にかける願いへの共感

IV 学習のまとめ ③時間

- ・酪農のさかんな地域について調べる(ひとり調べ)
- ・豊富の農業についての自分の調べを見直し、レポートにまとめる

他地域の酪農のさかんなところにもついて調べ、豊富の酪農と比較し共通点をさぐってほしい。

図1「学習指導計画」

## 2 「酪農にかける片岡さん」の本時の授業

「酪農にかける片岡さん」の追究における、本時(10/16時)の授業のねらいは、以下の通りである。

本時の学習のねらい…「男川沿いの山あいの地に開かれた豊富な地に根をはり、親子2代にわたり酪農を営み、経営を拡大してきた片岡さん。片岡弘さん(58才)が、昭和30年に1頭の子牛からかい始め、昭和35年から毎年1頭ずつ続けて3年も牛が死んだという事態をのりこえて経営を拡大してきたという事実から、片岡さんの酪農にかける強い願いを想像する」である。

「牛の死をのりこえてやり続けたわけ」について各自が自分の考えをつくる「ひとり学習」を経て、本時の「問い合い学習」(話し合い)の授業に臨んだ。

以下、授業記録という実践の事実から、学習者である子どもの生き方を含めた個性的な追究のあり方、さらに、学習者の生き方と感応し合う教師のあり方を視野におきながら本時の授業を分析し、考察していく。

### 3 授業記録における子どもの追究に学ぶ—子どもの本音の表出と考えのひびき合い—

#### (1) 「毎年1頭ずつ続けて3年間牛が死んでもやり続けたわけ」を考え合う子ども

本時の追究は、日直児童が「牛の死をのりこえてきた片岡さんの勉強をします。」という問題を提起するところから始まる。教師が、本時の学習の時代的な場面を確認してから、この問いを出した真を指名し、3真が自分の考えをみんなに話していく。

<豊富小5年白組「酪農にかける片岡さん」の授業記録(1982年6月30日実施より)>

- 3 真 やり続けたわけっていうので考えたんだけど、僕は3年間続けて牛が死んでもやり続けたわけは、牛が死んだときは原因がよくわからなくて、その次からいろんな検討をしてやっとして、それでも3年間ずっと死んでいってしまっていて、それで5年くらいあとにやっとして病気がわかって、その時はもう3頭か4頭死んでしまっていて、それで、その前の希望が、牛をふやすということと乳をたくさん出すということだけど、えさをやりすぎて死んでしまったということだから、「ふやす、乳を出す」という願いの前に「牛を絶対死なせないぞ」ということを考えていたから今日までずっとやり続けてきたんだと思います。
- 4 T 真君がこのことに興味を持ったもったわけというのがあるわけでしょう。そこら辺も言ってく

- れますか。
- 5 真 僕の家にはパピーという犬がいて、その犬の子犬が死んでしまった時も、片岡さんと同じような気持ちで、よくそのことがわかったから、そのことをやっていきたいと思ったからです。
- 6 T このやり続けてきたというのを、まとめていうと真君はどういうふうに考えているのかな。
- 7 真 自分と同じように、いろいろ勉強して、絶対死なせないぞと思って、今までもいろいろなこととか、えさを細かくしたり、窓をあけたり、扇風機で牛を夏バテさせないようにしたり、牛小屋をいつもきれいにそうじしたり、ふんをとってやったり、病気をさせないためにゴムマットや乳をケガさせないために足に輪をつけてみたり、いろんな工夫をしているということです。
- 13 直裕 牛をかうのをやめなかった理由は、牛がかわいいし、牛が好きだし、田んぼや畑だけではくらしが立てられないし、牛をかい始めたばかりなのでやめたくないし、牛の生まれるのと死ぬのが同じくらいだから(まだふやせると)かっていったのだと思います。
- 14 広人 僕も直裕君と同じことなんだけど、田畑だけでは生活ができていかないから、乳牛が死んでいてもやり続けたと思います。僕の家も、田畑だけでは生活ができないから、乳牛をかったんだけど、昭和35年におじいさんが農協に勤めに行ってしまうと、(おばあさん)1人でできるにわたりや豚をかって生活をととのえていて、そしておじいさんが農協をやめてから肉牛をかったので、僕は田畑だけでは家の生活ができないから、あの牛が死んでしまってもやり続けたと思います。／好子さんはどういうことですか(T)／
- 15 好子 私も家と比べてみたんだけど、／何とくらべた(T)／自分の家と。私の家はメリヤスをやっている、その(やり始める)きっかけが、おばあちゃんが、メリヤスをやっている、おばあちゃんの子どもの1番年上の人に本当はやってもらうんだっけけども、その年上の方がペンキ屋をやっている、メリヤスをつぐことができないので、代わりに家のお父さんがメリヤスをつぐことにして／メリヤスっていうのは、みんなわかりますか。どういうことやってるの(T)／せいだから、全部の服を作るんじゃないで、そではそでの一部とか、ここだったらこの一部とか、そういう所を作っている、それをぬったりあわせていくっていうこと。／服を作る仕事をやっているわけだね(T)／うん。で、この家のメリヤスのことで、牛の死とつながっているかなと思うことがあって、家のメリヤスは、失敗があつて、あの“おしゃか”っていうか、1本の線なんだけど、

2本の線にしちゃったり、そういうことがたくさんあって、その失敗と牛の死と何かつながるような気がするってということで、失敗とかするとそれは使えないからそこを切って捨てる時のお父さんの顔が、何か、せつかく機械が働いてくれるのにつらいなあというくやしそうな顔をしていて、そこが牛の死とつながるところで、あとやり続けたわけが、私は「片岡の家はもうだめだ」というので、何か近所の人から言われたということで／片岡さんの牛がつづけて死んだ時に、片岡の家はもうだめじゃないかといわれたということだね(T)／それを聞いた時に、私は、片岡の家はもうだめだとバカにされたから、自分は自分なりに一生けん命やっているのに、片岡の家はもうだめだなんて言われたら絶対もうくやしから、だからやり続けたってということで、家もその「片岡の家はもうだめだ」という(ことにた)経験があって、家のお父さんに聞くと、「村上の家はもうだめだ」といわれたことがあって、で、それを聞いたのが1度あって、その時にお父さんはすごいくやしかったらしくて、外に出て何かすごい大声で、何か、「見ている、今に大きな会社にしてやるぞ！」ってどなっていて、で、すごいくやしかったらしくて、何とか涙が出そうになっていてね、すごいかわいそうだって、そのことと同じようなことで、片岡さんの家もそういうふうに思ってやり続けたんじゃないのかなと思います。

16 T ふーん。すごい経験だねえ。好ちゃんのは牛の死と生き物じゃないメリヤスの失敗ということと、だけでも片岡さんのことと同じようなことがあるというすごい経験だねえ。

17 幹広 僕の家も、田畑だけではくらしが成り立たなくて、家でできりきり食べれるくらいで…／幹広君とこ、どれだけ作ってるの。(T)／田んぼ 20a／片岡さんとこは(T) 40a (Cn)／それで、蚕をやって少しでもお金をもうけようと考えとって、それで前は家いっぱいやっていただけで、だんだん時がたつにつれて、だんだん蚕がすくなくなってきた、それで、おばあさんは年になってきたもん、えらくなってきてねえ、それで、おばあさんは、もう坂がのぼれんくなってやめちゃって、それで片岡さんちは、あの続ける人というか、幸雄さんや光明さんがいるからいいんだけど、僕の家はもう続ける人がいないから、お父さんもお母さんもみんな工場へ行っちゃって、そいだからおばあさんと片岡さんと比べると片岡さんのがまだいい。

18 明雄 はい。僕は、やり続けたわけは、うんと3頭続けて死んだ時は、光明さんと幸雄さんは子どもで、片岡さんは光明さんと幸雄さんの2人をちゃんと大きく育てて

大人にしなければいけないと思って、片岡さんは自分の力で育てなければいけないと思って責任を感じたみたいで、それで2人を育てるには、お金とかそういうものがあるから、また続けてやっただと思います。

<授業記録等、児童名はすべて仮名>

## (2) 真の追究—思いや願いという感情と知識とをつなげて考えを深めていく—

本時の第1発言者としての真の発言には、自分の飼っていた子犬のパピーの死という出来事が生活背景にある。真は、4月からの日記の題材として、自分の飼っている犬のパピーのことを何度も取りあげていた。3真、5真は、子犬のパピーの死という生活経験から、牛が死んでしまっても片岡さんがやり続けたわけは、「牛を絶対死なせないぞ」という思いだと想像している。しかし、真の追究はそれだけにとどまっていない。

7真では、絶対に牛を死なせないために、えさを細かくしたり、窓を開けたり、扇風機で牛を夏バテさせないようにしたり、牛小屋をいつもきれいに掃除したり、糞を取ってやったり、病気をさせないためにゴムマットを敷いたり、乳房炎を防ぐために乳をケガさせないように足にカバーの輪をつけてみたりと片岡さんの「いろんな工夫」に気付いている。

「牛を絶対に死なせないぞ」という思いを現実のものにするために、具体的に工夫を積み重ねていった行動に目を向けている。自分が見学や聞き取り調査して得た知識を片岡さんの思いや工夫につなげ、自分の考えを深めていく真の追究の姿が見て取れる。

授業の中では、こうした方向での追究はまだ萌芽にとどまっている。さらに立ち止まって知識と思いや願いとをつないでいくことが追究を深くする重要な視点として浮かび上がってくる。

13直裕は、「牛がかわいいし、牛が好きだし」という視点に付け加えて、「田んぼや畑だけではくらしが成り立たない」という視点を提起している。

これを受けて、14広人が「僕の家も、田畑だけでは生活ができないから」と、自分の家のくらしの成り立ちを引き合いに出して、片岡さんの思いを想像しようとしている。

## (3) 好子の追究—「共育ち」の協同的な学びが、自己の生き方を考える契機を生む—

さらに15好子は、「私も家と比べてみたんだけど」と、片岡さんと自分の家のメリヤス工場のこと

どうしてもみんなにこのことは伝えたいという発言への思い入れの強さと共に、その発言を丸ごと受け止め、自らも自分の家の事例を持ち出してつないで発言していく仲間の存在が不可欠である。好子の心の中に培われてきた無意識の内に存在する学級の仲間への信頼感こそが、自分の本音の意見を堂々と披瀝できた大きな要因であると考えられる。

好子自身が、家が近くで何度も片岡牧場に遊びに行ったり、子牛の出産の場面にも一緒に立ち会ったりと片岡牧場の存在が、自分の中に入っている状態にあったと言える。まさに体当たりの追究が、深い探究的な学びを生み出したと言える。みんなの前で本音の意見をさらけ出し、堂々と披瀝できたところに好子の個としての学びと成長を見て取れる。

それと共に、好子の意見を受け止めて、つなげて真剣に考え合っていく、温かい雰囲気を出してきたことは、学級集団の学びと成長を物語っている。片岡牧場の体当たりの追究を通して、子ども同士がつながっていったのである。ここには、「共育ち」とも言うべき子ども同士の考えのひびき合いがある。体当たりの追究が、授業の中での教材と子どもとのひびき合い、子ども同士の考えのひびき合いという協同的な学びを生み出しているのである。重松の言う「共存の感情<sup>7)</sup>」の個と集団とのひびき合いの姿がある。

そこには、総合的な学習の時間の目標である「探究的な学習を通して、...中略...自己の生き方を考える<sup>8)</sup>」子どもの追究の姿が見て取れる。

教師の予想を超え、教師自身の目を開かせてくれた好子の発言であったといえる。

#### (4) 酪農を親子2代にわたってやり続けた片岡さんの強い願いに迫る子ども

授業の中盤には、片岡さんが親子2代にわたって牛舎を増築していったという歴史的事実に着目し、そこに酪農経営への強い思いを類推していく子どもの追究がみられる。

<豊富小5年白組「酪農にかける片岡さん」の授業記録(1982年6月30日実施より)>

33 直裕 ①の小屋から②の小屋へかえたのは、自分で牛をかうのを続けていくと決心したこととそれと牛がきつとふえるという自信があったからだと思う。/自信というのは(T)/牛が35年から死んでしまったけど、これからはもっと

34 広人 ふえるという自信。だから牛小屋を大きくした。僕は、小さいころから片岡さんたちは、乳牛をたくさんかう夢をもっていたから、牛が死んでいてもやり続けたと思います。

36 潤子 生活ということにも失敗ということにも、私はやり続けたわけというのがあって、私のやり続けたわけということの考えは、1度失敗してもあきらめずにそれをのりこえて同じことを2度とくり返さないということと、2つ目は、片岡さんは自分の夢があって、大きな酪農にする、その時は3頭連続で死んだりしたんだけど、それであきらめないで大きな酪農にするという夢のためにやり続けたということと、3つ目は、牛がかわいいから。かわいってというのは、さっき裕君が直裕君に反対って言ったでしょう。だけど、私は直裕君の意見に賛成で、あの1ヶ月ぐらい(死んだ牛のことを)忘れられないって言ってたでしょう。見学の時に。それだけ悲しいんだから牛がそれだけ悲しいってことだから、その理由もあったし、4つ目の理由は、酪農一本で生活を立ててきたから、生活にかかわる問題で、お金がもうからなければいけないから、そのためにも、生活を立てている酪農を続けたと思います。

37 T そのためにお金がもうかるという見通しがあったのかな。そこら辺はどうかなあ。

38 潤子 ふつう、やり始めたからには、もう最後まであきらめずにやらないといけないから、片岡さんは自分で決意したから酪農一本でこれから生活しようということ、お金がもうからなければ生活が立てていけないでしょう。それで酪農一本でお金をもうけて生活を立てていくためにも、酪農をやり続けたわけがあると思います。

33 直裕は、①から②の牛小屋へと拡張した事実から、片岡さんは、「自分で牛をかうのを続けていくと決心した」、「牛がきつとふえるという自信があった」という考えを導き出している。

34 広人は、片岡幸雄さんの小さい頃からの「乳牛をたくさんかう夢」が牛を飼うことを継続させたと言っている。

36 潤子は、片岡さんがやり続けたわけを自分なりに整理し、①一度失敗してもあきらめない、②大きな酪農にするという夢のため、③死んだ牛のことが忘れられないくらいかわいい、④酪農一本で生活を立ててきたからと4点にわたって述べている。さらに、38 潤子は、「片岡さんは自分で決意したから酪農一本でこれから生活しよう」として発言している。そこには、強い気持ちをもって酪農一本の生活に舵を切り、酪農にかけようとした片岡さんの「決

意」に共感したこの子の思いが表明されている。

#### (5) どの子の発言にも自分の生活という考える足場がある

学級のどの子の発言にも、力強さがあるのはどうしてなのだろうか。様々な要因が考えられるが、ここで見て取りたいのは、次のような視点である。

どの子の発言にも、自分の生活という足場があるということである。それぞれの子どもの発言の背景には、その子の生活と深いかかわりをもった生活意識が存在するのである。どの子にも、自分の考えに生活という足場があるから、学級の仲間の中に本音の意見を打ち出していく個の強さが生まれてくるのではないだろうか。

良子の発言もその流れの中で出てきている。さらに、好子の自分の本音を表出した発言を契機に、友達のとつなげて、自らも自分のくらしから生まれてくる生活意識と重ね、自分の考えを表明していくという学級の雰囲気醸成されていっている。好子の考えに触発され、自らのくらしに引き寄せ、自分の足場をもとに発言を重ねて追究していく姿が見て取れる。まさに、ここには探究的・協同的な学びが存在すると言えよう。

子どもの体当たりの追究という探究的な学びが、生活に足場のある発言を生み出し、そして、その子の発言に他の子どももひびき合ってさらに追究を深くしていくことが可能になるのである。

子どもが生活という足場をもって自分の考えを出していくことにより、子ども同士の考えがひびき合って深くなっていくのである。ここに、総合的社会科学習から総合的学習へとつながる実践深化の視点であると言える。

#### 4 牛にたくす願いを歌うー社会科学習から合科的・関連的・総合的展開へー

社会科として酪農経営にかける片岡さんの生き方を追究する中で、様々な出会いと感動のドラマが生まれてきた。社会科の見学時だけでなく、自主的に片岡牧場に遊びに出かけて、糞掃除やえさやりなどをやらせてもらう子も出てきた。また、もうじき子牛の出産があるということで夜の牛の出産の場面に、教師や牧場の近くの子どもが立ち会うことができた。その子牛の出産の様子をビデオに撮って学級で見合ったり、牛の絵を描いたり、牛の詩を作ったりして

いった。

子どもが受けた感動を絵や詩にも表現し、分かち合うことで、追究は関連的・総合的な様相を見せていった。家族のように接し、出産に臨む親牛を励ます片岡さんに、子どもも教師も夢中になっていった。

社会科「酪農にかける片岡さん」の実践は、音楽専科の参木芳子教諭の協力により、音楽科「牛にたくす願いをうたう」の実践も併行して合科的・関連的に行われた。子どもの感じた思いや願いを自己表現していく活動の展開により、子どもの追究には一層拍車がかかっていった。

こうして出来上がったのが、「牛にたくす願いをうたう」と題した、子どもの手による13曲の自作の詩と歌の作品群である。

#### 「牛にたくす願いをうたう」児童の歌作品

- 「①おめでとう（子牛の誕生をいわう）」（雪恵）
- 「②さみしくなんかない」（親牛と分かれた子牛を励ます）（浩子、潤子）
- 「③生まれた 生まれた（子牛の誕生を祝う2部合唱）」（潤子）
- 「④子牛が生まれる」（有貴子、秋美、真有美、高二、明雄、宗博）
- 「⑤牛にえさをあげるときの気持ち」（友子、宮子、千津、広人、亨）
- 「⑥乳しぼりのうた」（康治、有貴、幹広、真二、高章、岩次郎、健男）
- 「⑦小さな仕事（自分の体ほどもある大きなスコップを手に汗を流してえさ運びをしていた弘一君、弘一君はお父さんの後を継ぐだろうな）」（雪恵・好子）
- 「⑧レノラ（乳房炎にかかった牛へのよびかけ）」（路代、潤子、佳織、広子）
- 「⑨がんばれ親牛（たおれた親牛になって）」（真、大介、直裕、徹也、博之、教子、真木子）
- 「⑩1日の仕事（片岡牧場の1日の仕事）」（好子、雪恵）
- 「⑪生産調整（乳量の出荷制限への農家の思い）」（大介）
- 「⑫片岡さんの強い意志（牛が3頭も続けて死んでしまったのを乗り越えた片岡さんの決意）」（直裕）
- 「⑬生まれたよ（子牛の誕生）」（真有美）（合計13曲）

自作の歌作りは手探りの追究であったが、そこには、片岡牧場という追究対象にかかわって、その子なりに最も心が動いた場面や出来事、人物（牛を含めて）への思いが歌い込まれている。

社会科学習の本時で話題になった、牛の死を乗り越えてきた片岡さんについても、子どもたちの関心は高く「⑨がんばれ親牛」、「⑫片岡さんの強い意志」の歌となって表現されている。

「⑨がんばれ親牛」（真、大介、直裕、徹也、博之、教子、真木子の共同制作）



親牛が一 ※さがる  
ズッシリと一 ※あがる  
たおれた一 ※さがる  
大きな一  
体がー  
よーこーたーわってー  
「がんばるぞー。」  
と言ってるように  
片岡さんを見たー

社会での授業で問題になっただけに、片岡牧場の親牛が死んだという場面には多くの子が心を動かし、「がんばれ親牛」と題した共同作品を作っている。個人作品としてではなく7人の共同作品というところに子どもの強いこだわりと思いを感じる。

「がんばれ親牛」という題には、片岡さんの思いに共感している子どもの姿が感じられる。『「がんばるぞー。」』／と言っているように／片岡さんを見たー』という歌詞の表現には、片岡さんと牛との心のふれあいを感じ取っていることが伝わってくる。

また、直裕は、親牛の3年連続した死を乗り越えて酪農にかけていった片岡さんの思いを「片岡さんの強い意志」と題した歌に仕上げている。

「⑫片岡さんの強い意志」(直裕・作)

(呼びかけ)

片岡さんの家には、牛が三頭いた。  
でも、毎年一頭ずつ死んでいってしまった。

「片岡の家は、もうだめだ。」

「片岡さんは、もう終わりだな。」

(歌)

牛がかいたい  
牛がかいたい  
せっかくここまできたのに  
牛がかいたい  
牛がかいたい  
続けていきたいな

三度にわたる牛の死を乗り越え、「片岡の家はもうだめだ」という声にも負けないで、牛を飼い続けた片岡さんの思いが「牛がかいたい」という言葉の繰り返しに表現されている。

子どもたちの、自分たちで作った歌をぜひ片岡さんや牧場の牛たちにも聴いてもらいたいという強い願いがかない、片岡牧場でミニコンサートを開くことができた。当日、片岡さん一家と隣人、そして牛たちが熱心な聴き手となり、子どもたちに温かな拍手と歓声を贈ってくれた。以下は、その時のミニコンサートの様子を書いた宮子の作文である。

牛の歌のミニコンサート 1982年度 5年 宮子

きのう、片岡さんの家に行って、私たちの作った歌のおくりものに行った。片岡さんは、最初どんな歌だろうと思っているよううれしそうな顔だった。牧場に集まって、やっと待ちに待ったミニコンサートが始まった。そして、雪恵さんの作った保育園の弘一君のお手伝いの「小さな仕事」の歌だ。

片岡さんは、聴いているとき、足を一、二、一、二、というようにたたいて、タンタンとリズムをとりながら、一つ一つみんなていねいに聴いてくれた。小さい弘一君も、この歌の時ははくしゅをしてくれたし、すごく楽しそうだった。

幸雄さんの笑い声は、すごくひびくし、おなかの底から笑っているみたいだ。幸雄さんたちは、歌を聴いている時、歌詞の中身をそうぞうしているみたいだった。幸雄さんのお父さんの弘さんも、時々目をつぶって聴いていた。「親牛がずっしりとたおれた」という歌のところは、頭の中で、昔死んでしまった牛がどんなふう<sup>に</sup>たおれたのか、その時のことを思い出していたと思う。

作ったわたしも、聴いた人も、みんなこの歌を忘れない。いつまでも心に残ると思う。

宮子の作文の、「私たちの作った歌のおくりもの」や「やっと待ちに待ったミニコンサートが始まった」という言葉には、片岡牧場の学習で感じ取った思いの詰まった自分たちの作った牛の歌を片岡さん一家に是非とも伝えたいというという気持ちが表れている。また、「片岡さんは、聴いているとき、足を一、二、一、二、というようにたたいて、タンタンとリズムをとりながら、一つ一つみんなていねいに聴いてくれた」「小さい弘一君も、この歌の時ははくしゅをしてくれた」「幸雄さんの笑い声は、すごくひびくし…歌詞の中身をそうぞうしているみたいだった」など、自分たちの作った歌を片岡さん一家が真剣に受け止めてくれたことの喜び表現している。片岡さん家族との心のふれ合い、ひびき合いがこの子の心はずませている。

宮子は、「『親牛がずっしりとたおれた』」という歌のところは、頭の中で、昔死んでしまった牛がどんなふう<sup>に</sup>たおれたのか、その時のことを思い出していたと思う」と記している。子どもたちは牛の倒れた場面を見ているわけではないが、「時々目をつぶって聴いていた」片岡さんの様子と重ねて、その状況を思い描いている。

子ども自らが、詩を書き(国語)、曲を作って歌う(音楽)という豊かな自己表現活動を通して、今まで社会科授業で探究してきた思いを改めて振り返り、一層深める契機を獲得することができたのである。

体当たりの追究は、追究事実に深く関わる中で生まれてきた子どもの思いや願いをもとに多彩な形で自己表現していくことをも含み込んでいるのである。

地域学習が子どもたちの追究の意欲を育て、子どもたちの生き生きとした活動が子どもと地域の人々との温かい心の交流を生んでいる。ここには、子どもと教材（片岡さん家族、片岡牧場の牛たち）との「心の通い合い」（重松）が生まれているのである。

こうした地域の人々との触れ合いの中で、総合学習が成立し、支えられていることを肝に銘じたい。

### 5 30年ぶりの同級会の話題一心に残る片岡牧場の追究一

2014年4月、筆者の38年間の教員生活の節目の年と言うことで、実践当時の教え子達が集まって同級会を開いてくれた。その中で、思い出話に花が咲いた一番の話題が、この片岡牧場の実践のことであり、牛の歌作りや片岡牧場でミニコンサートのことであった。

「そうそう、片岡牧場に行って、糞掃除とか乳しぼりとかやって楽しかったよね。」

「私は、牛のお産がある時に、家が近いで見においでって言われて、夜に見に行っちゃったよ。」

「ビデオで出産シーンを見たりして、牛の歌を作ったよね。」

「そうそう、牛や片岡さんに聞かせてあげるって言って、牧場でミニコンサートをやったよね。」

「私は、今もあの時作った歌を覚えてるよ。」

「ぼくは今も歌えるよ。『親牛がずっしりと、たおれた』ってね。」等々。(2014.4.16 豊富小学校卒業生同級会での会話)

30数年の時を経て、今なお、子ども心に深く刻まれた鮮明な記憶として残っているという事実に感銘を受けた。一瞬のうちに、あの当時の片岡牧場の世界に舞い戻った自分がいた。

5年生当時、宮子が、「牛の歌のミニコンサート」の作文の最後に、「作ったわたしも、聴いた人も、みんなこの歌を忘れない。いつまでも心に残ると思う」と書いていることが現実のものとなった。

「酪農にかける片岡さん」の授業実践は、「幼い時や、若い時の、純真な自分に、かえらせてくれるところ、そういうなつかしい思い出や感動というふるさと」（重松）の形成につながっていると考える。

今から30数年前、豊富小学校の青年教師時代の筆者と、酪農家の片岡幸雄さん一家との出会いは、何か運命的なものであったと感じる。片岡牧場の片岡さんや牛たちには、一過性のその時限りに終わら

ない、「伴侶としての教材<sup>9)</sup>」（重松）ともいうべき魅力と教材性があったのである。

### III 研究の成果と今後の課題

#### 実践分析からみえてきたもの一実践深化の視点一

社会科学習「酪農にかける片岡さん」の授業実践の分析から、総合的学習の実践の深化拡充のためのいくつかの視点が明らかになってきた。

#### 視点① 魅力ある地域教材とひびき合う子どもの「体当たりの追究」

子どもの思いや願いを元に、地域の教材に体当たりの追究をすることが、子どもの学びと成長の基盤となっている。そのことは、子どもの追究意欲と地域教材の魅力とがひびき合う体当たりの追究が、単元の基盤にすわることの必要性を示している。

「やらされている体験」や「本やインターネットで調べることが主となっている総合」から、「子ども自らが求め、本気で追究していく総合」への転換に欠かせない視点である。

このことは、探究的な学びが単なる知識の操作に終わらずに、体全体を働かせての追究になることの重要性を示唆している。この視点は、総合的学習の追究にとどまらず、各教科の追究にも活かしていくことが求められている。

#### 視点② 子ども・教材・教師がひびき合う「共育ち」の追究

片岡牧場の牛の死という事態に入り込んで、自分の家のメリヤス工場の「おしゃか」を引き合いに出して、自分の家の父親の悩みや苦しみや叫びと重ねて片岡さんの思いに迫ろうとした好子の追究があった。教材である片岡さんと心通わせることで自らの本音を披瀝し、生き方を見つめ、考える姿がそこにある。「共育ち」の追究とも言うべき、子ども同士の考えのひびき合いがある。

こうした追究を引き出す要には、教材と子どもとのひびき合いがある。それと共に、自分の家のくらしぶりを引き合いに出して、考えを重ね合っていく学級の仲間が醸し出す追究の雰囲気がかかせない。子どもが自分の生活という足場をもって考えをひびき合わせることが、追究を深くしていく視点となるのである。

また、子どもの生活意識を掘り起こし、授業の中

で子ども同士の思いや願いとその背景をひびき合わせるような教師の出やかかわりも重要である。

子ども・教材・教師がひびき合う「共育ち」の探究こそが総合学習の探究を支える基盤なのである。

### 視点③ 子どもの探究を支える教師の探究心

子どもと共に片岡牧場に体当たりの探究をしていく中で、社会科学習から、詩や牛の歌の創作など科学的・関連的・総合的な探究へ発展していった。その探究の中で何より、教師自身が、片岡牧場とそこで酪農を営む片岡さんの人間としての生き方という教材のもつ魅力に感動し、その探究に夢中になっていった。

単元の展開に従って、片岡牧場に何度も足を運ぶことで、授業構想の見直しも行われていった。それと共に、片岡さんという酪農家に魅せられていく筆者自身がいた。糞掃除やえさやり、乳しぼりの体験をしながら、話を聞いたり語り込んだりするうちに、片岡さんの人となりとその存在が、自分の中に大きくふくらんでいくのを感じた。夜に子牛の出産があるとの電話をもらえば、ビデオカメラをもって駆けつけて、家が近所にある子どもと共に出産シーンに立ち会うことで、いのちの誕生に感動した。

片岡牧場で自分が感じ考えたことを、学級の子どもにもできるだけ出会わせたい、考え合いたいという思いが強くなっていった。教師が夢中になって味わった感動は子どもにも伝わり、子どもも探究に夢中になっていく。教師自身が片岡牧場の探究にのめりこんでいったことが、子どもの探究を支える大きな役割を果たしたことは間違いない。

教師の中に単元探究への構想がふくらむとき、子

どもとの探究も豊かに深くなっていった。試行錯誤しながら、子どもと体当たりの探究を深くすることで生まれる教師自身の探究心こそが教師の成長の鍵となる。教師の探究心が「教材の発見」をもたらすと共に、「子どもの発見」をもたらすのである。

本稿では、地域に根ざした社会科学習の典型実践事例として小5「酪農にかける片岡さん」の実践事例をもとに、子どもの「体当たりの探究」(学びと成長)の様相を分析し、そこに息づく総合的学習の実践深化につながる視点を考察してきた。

「総合的な学習の時間」が教育課程に位置付いていない時期の「総合的社会科」とも言える実践の中に現代の総合的学習の実践を深化拡充させていく視点が萌芽として確かに存在していたことを明らかにすることができた。こうした視点は、「総合的な学習の時間」が創設された時期に活かされ、現在の実践にも生きてつながっているのである。

また、本実践は、担任教師としての自己形成過程の中核に位置付く1982年度の実践であり、教師としての基盤を形成した時期のものである。本稿では、教師の自己形成への重要な視点として、教師が教材に夢中になり、子どもと共に感動を共有する「子どもの探究を支える教師の探究心」のもつ意味を明らかにすることができた。

今後は、さらに、筆者の教育実践の歩みを踏まえ、教師としてのライフステージごとの典型的な授業実践事例における子どもの探究の分析・考察と共に、教師の自己形成過程についても探究を深めたい。

<sup>1</sup> 中野真志・大町智編著「総合的学習の特質と探究的・協同的な」『探究的・協同的な学びをつくる』、三恵社、2013、p.102

<sup>2</sup> 額田地域の教育実践の伝統

愛知県西三河地方の山間部に位置する地域である。愛知県額田郡額田町であったが、2006年1月1日より岡崎市との市町村合併により岡崎市額田地区となる。額田地域には、豊富小学校の重松鷹泰をメイン講師にして続けられた「自主学習への過程」をテーマにした研究実践に典型的に見られるように、地域に根ざし、子どもが主人公となる教育実践を探究し、創造してきた教育の伝統がある。

<sup>3</sup> 田村学『『総合的な学習の時間』誕生と理念の形成』『日本生活科・総合的学習学会誌せいかつ&そうごう』第21号、2014、p.4

<sup>4</sup> 重松鷹泰・豊富小学校『板書する子どもたち』明治図書、1974、pp.182-183

<sup>5</sup> 日比裕・重松鷹泰『授業分析の方法と研究授業』学研選書、1978、pp.24-25

<sup>6</sup> 清水毅四郎『個性的探究を支える授業』大阪書籍、1989、

pp.24-27

<sup>7</sup> 重松鷹泰『初等教育原理』明治図書、1971、pp.68

「共存というのは、自分が一個の人間として他の人間と共に生きているという意味であり、感情というのは自分の奥深い感情にひびくところまでその事実を認識しているという意味である」「共存の感情は、それゆえに、まず、他の人々の人間的な動きに対する共鳴である。他の人の喜び・悲しみ・希望・悩み・怒り・妬み等々のさまざまな動きの根底にある人間として生き抜いていこうとする表情を、自分の中にある感情によって感得することである」

<sup>8</sup> 文部科学省「小学校学習指導要領解説編 総合的な学習編」、東洋館出版社、2008、p.10

<sup>9</sup> 重松鷹泰『初等教育原理』明治図書、1971、pp.152

「教材には、そのときにわたくしたちにせまってくるものだけでなく、長い間わたしたちにくりかえし問いかけてくるものもあるのである。わたしたちは教材のこのような性質を、伴侶性と呼ぼうと思う」